月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.153



アリサがハロウィンを華麗に盛り上げる！

『英雄伝説 暁の軌跡』

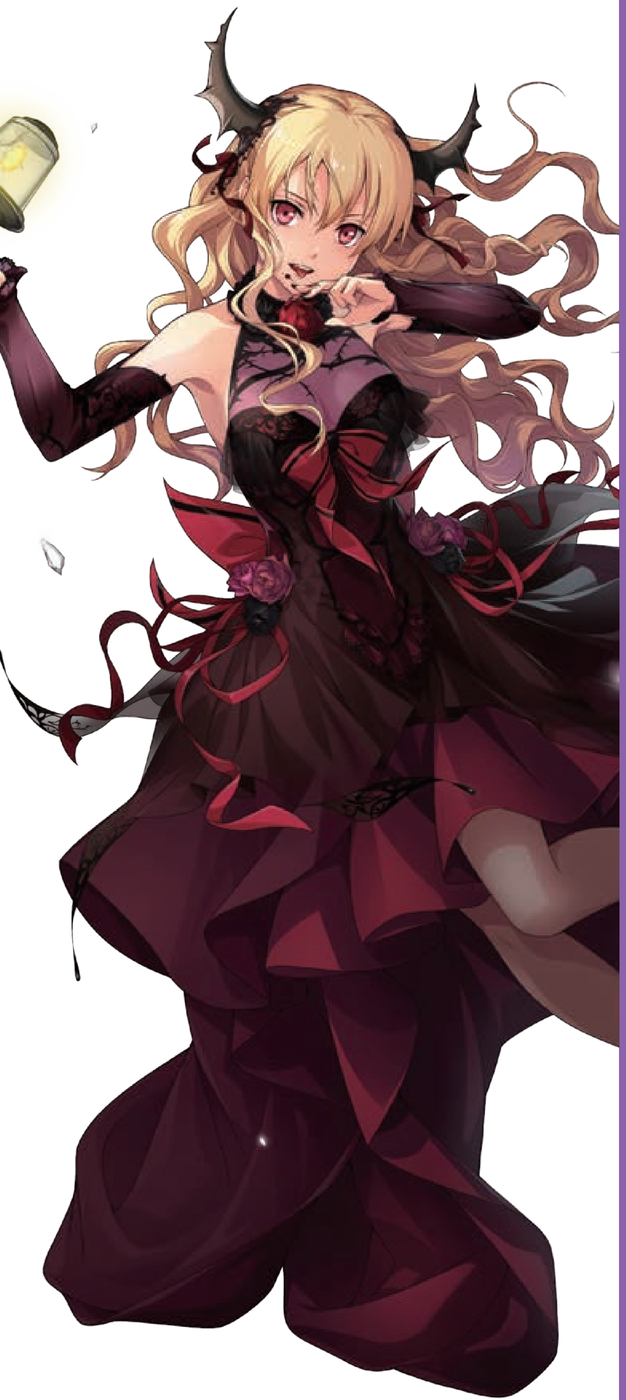
ファルコムニュース

英雄伝説 空の軌跡

リベール王国スナップショット

運命の“マナの枷”♥

も～っと集まれ！ ファルコム学園



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

★無作為強制カップリングはじまるよ!★



繋がれた者たち



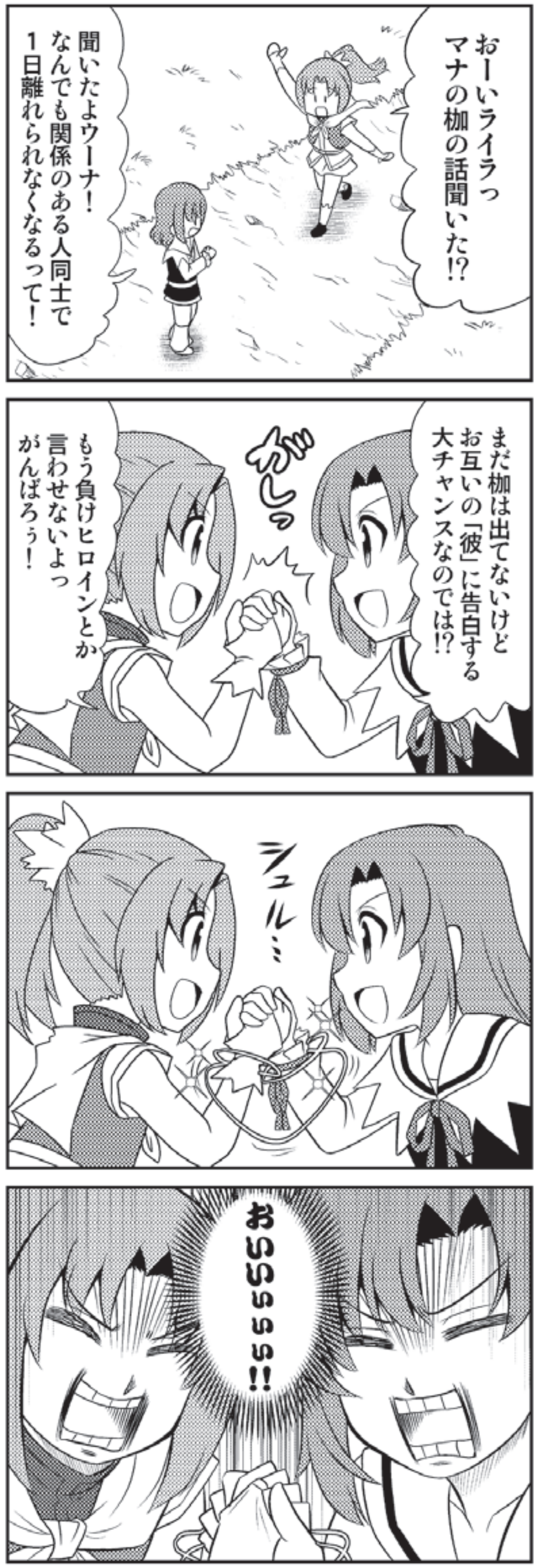
マナの枷



法則



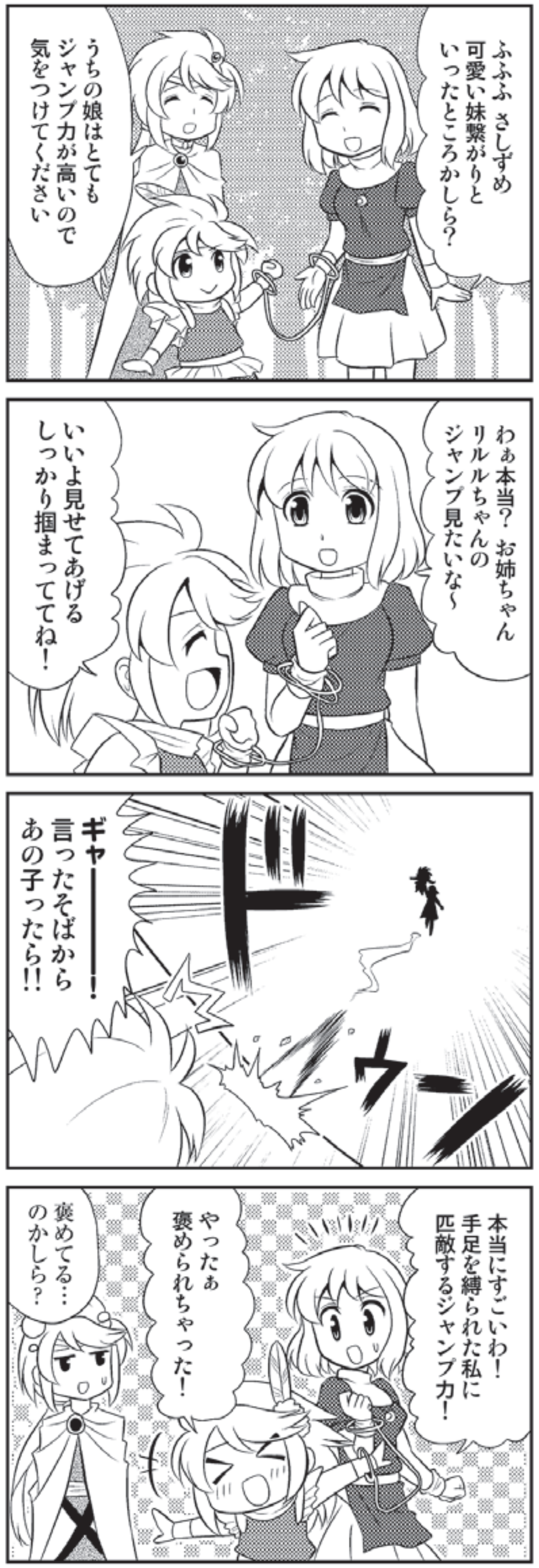
負けられないヒロインたち



お父さんはモンスター



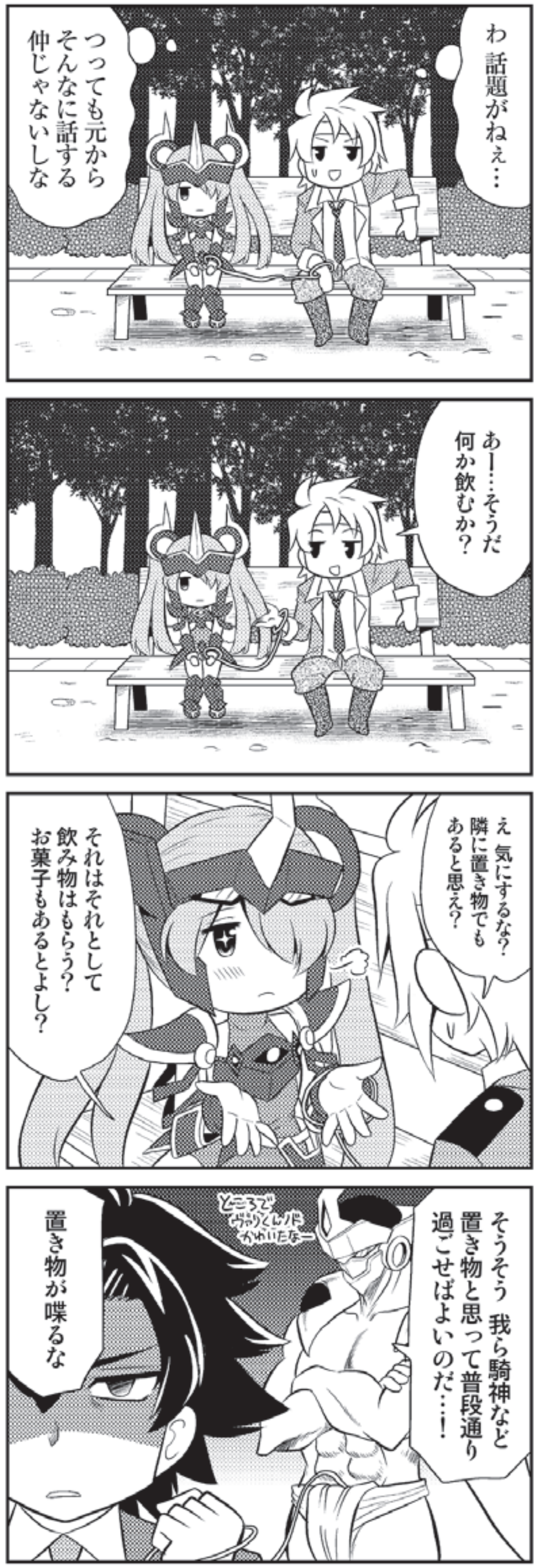
ジャンプ自慢な娘



お互いの歩幅



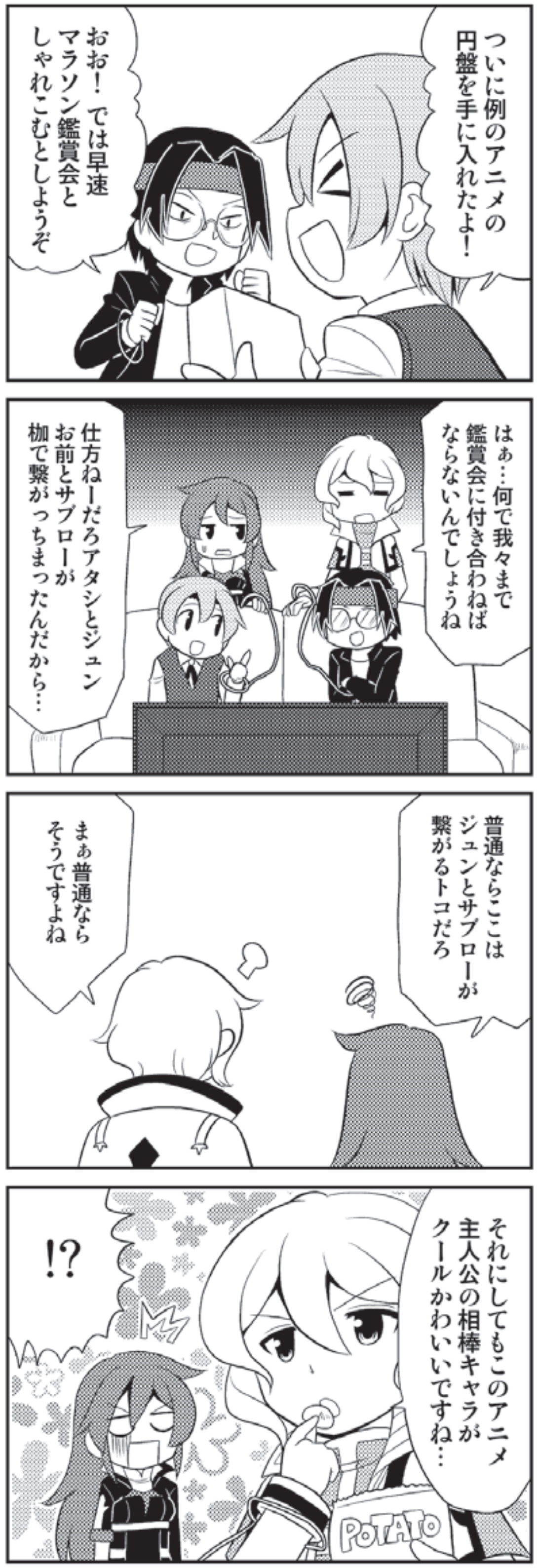
騎神の立ち位置



マナの流れに乗って



目覚める素質



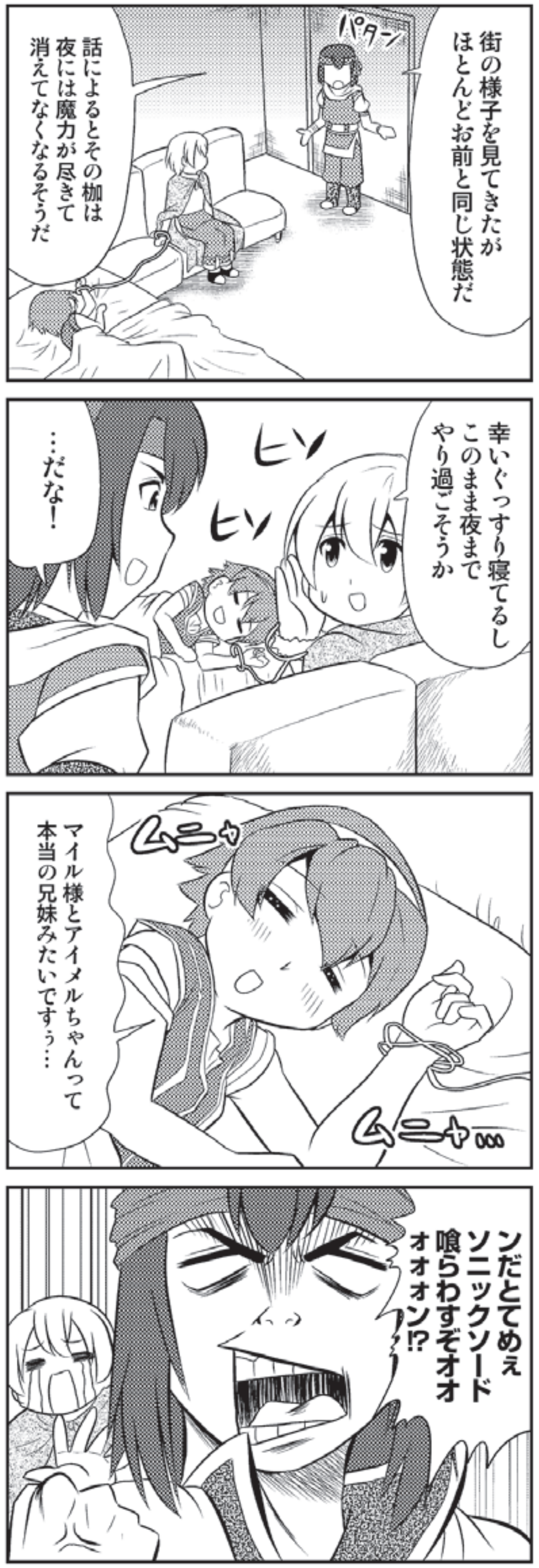
嬉しかったお兄ちゃん



蘇る悪夢



逆鱗に触れる少女



詰んでいた王子様




英雄伝説 創の軌跡
THE MISERABLE SINNERS 01
漫画：墨天業
《仮面の隠者》《暗殺者》《自律人形》
それぞれの思惑を胸に
運命と真実に迫る物語
定価:1000円(本体909円+税)
ISBN978-4-8021-3309-8
発行:フィールドワイ 発売:メディアパル
©Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.
©BOKUTENGOU ©Field-Y


穏やかで騒がしい生活が戻ってきたファルコム学園。
徐々に英雄、戦士、さらには曲者までが還ってくるなか、
新たに「イースⅨ」のキャラクターも参戦！
まだまだ止まらない異能・新久保だいすけの筆が冴え渡る！
おまたせ！
待望の第2巻だよ！
も〜っと集まれ！
ファルコム学園②
新久保だいすけ
定価：本体 900 円＋税
ISBN 978-4-8021-3213-8
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved. ©DAISUKE ARAKUBO ©2020 FIELD-Y

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

LINEスタンプ「イースX」登場！

ファルコムのLINEクリエイターズスタンプ第42弾「イースX-NORDICS-」のスタンプが販売開始！



■販売ページ
https://store.line.me/stickershop/product/24663404/ja
■ファルコムLINEコンテンツ
https://www.falcom.co.jp/line



壁掛＆卓上ファルコムカレンダー2024予約受付中！

2024年のファルコムカレンダーは『壁掛』と『卓上』をご用意。お得なセット販売には、限定特典『特製ポストカード』も付いてきます。





■発売日：2023年12月7日　■価格：3,300円（税込）
■内容：表紙＋12枚　■サイズ：B3タテ

■【軌跡20th卓上カレンダー2024】

『軌跡シリーズ』20周年を記念し、12か月分すべて新規描き下ろしイラストを収録した『卓上カレンダー』をご用意。スタイリッシュなデザインなので、ご自宅だけでなく会社のデスクなどにも飾ってお使いいただけます。

■発売日：2023年12月7日　■価格：1,870円（税込）
■内容：表紙＋12枚　■サイズ：W180xH150mm（台紙）

販売ページ
https://falcom.shop/products/detail/590

■【カレンダー2024壁卓セット★特典付】

■発売日：2023年12月7日　■価格：5,000円（税込）■内容：表ファルコム壁掛カレンダー2024、軌跡20th卓上カレンダー2024、特典ポストカード

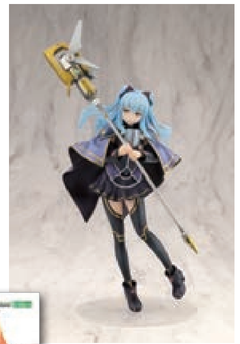
販売ページ
https://falcom.shop/products/detail/591

■【ファルコム壁掛カレンダー2024】

2022年後半から2023年を彩ったファルコムタイトルのイラストを収録した『壁掛カレンダー』。イラストがメインのデザインなので、寝室やリビングの壁に飾り、アートとしてもお楽しみいただけます。使用後は日付部分をカットすればポスターにも！

販売ページ
https://falcom.shop/products/detail/589

『軌跡シリーズ』フィギュア化企画第8弾「ティオ・プラトー」予約受付中！



コトブキヤと日本ファルコムが贈る『軌跡シリーズ』フィギュア化計画第8弾「ティオ・プラトー」1/8スケールフィギュアの予約を受付中。彼女の代名詞ともいえる猫耳型のカチューシャや胸部装甲、こちらを見つめるクールな表情など、当時のティオの魅力を余すことなく再現。彼女が開発にも関わった「魔導杖（オーバルスタッフ）」を、両手でギュッと握りしめたかわいらしいポージングにも注目です。

また、フィギュア化計画9弾が決定！『英雄伝説 空の軌跡SC』より、主人公「エステル・ブライト」がフィギュア化されます。続報をお楽しみに！



■メーカー受注締切：2023年12月5日（火）※以降は上限に達し次第受付終了
■発売日：2024年5月予定　■価格：20,900円（税込）

コトブキヤオンラインショップ
https://shop.kotobukiya.co.jp/shop/g/g4934054056118/?utm_source=kotobukiya.co.jp&utm_medium=referral&utm_campaign=product

公式完全攻略本『イースX -NORDICS- 公式コンプリートガイド』発売！

広大なオベリア湾を探索しつくすための公式完全攻略本『イースX -NORDICS- 公式コンプリートガイド』が11月14日に発売されます。海図も航海術も戦略もこの一冊に凝縮。カージャ衣装「アバタール・レイヴン」のダウンロードシリアルも封入！



■発行：株式会社KADOKAWA Game Linkage
■発売：株式会KADOKAWA　■発売日：2023年11月14日
■価格：2,970円（税込）

販売ページ
https://falcom.shop/products/detail/585

10月の新/衣装替えキャラクターをチェック！

THE LEGEND OF HEROES

暁の軌跡

アカツキノキセキ

毎月魅力的な新キャラクターや衣装替えキャラクターが大注目の『英雄伝説 暁の軌跡』。
10 月はやっぱり「ハロウィン！」ということでアリサが衣装替え姿を披露。
おなじみ、「ナハトの奮闘記」ではドルン兄が大活躍!?

『英雄伝説 暁の軌跡』公式ホームページ
http://akatuki.ujj.co.jp/
公式X
https://twitter.com/akatsuki_ujj



ハロウィン・アリサ

小悪魔……どころか魔王様!? なアリサ。可愛い系の衣装を着ることが多いというイメージを覆す、グッと大人っぽい妖艶な衣装となっている。

『暁の軌跡』極秘資料館

「ハロウィン・ロナード」衣装デザインラフ
（2022 年 10 月実装）



「ハロウィン・アリサ」衣装デザインラフ
（2023 年 10 月実装）



期間限定イベント「ナハトの奮闘記 Vol.27 ドルン編」が実装！

遊撃士協会クロスベル支部を訪れたドルンは数百万ミラの価値があるという古酒を取り戻すためナハトを連れて旧市街へと向かう。
緊張感が漂う中、窃盗団のアジトで二人を待ち受けていたものとは……！？









※このイベントは終了しています。

※画像は開発中のものです。※上記のイベントは状況により内容の変更を行う場合があります。


『英雄伝説 閃の軌跡』のアリサたちが魔法少女に!?
脚本家・山下憲一（TV アニメ『みんな集まれ！ファルコム学園』）と漫画家・さがら梨々（コミック『閃の軌跡』）の強力タッグが贈るシナリオブックが登場！ 平穏な日常に突如現れた怪物。その時、アリサのキーホルダーが不思議な光に包まれて……!?
あなたにお届け！
愛と希望の流れ星！
魔法少女
まじかる★アリサ
決定稿
著：山下憲一
イラスト：さがら梨々
原作：日本ファルコム
好評発売中！
判型：A5正寸 ／ ページ数：160 ／ 定価：1,300円（税別） ／ ISBN978-4-8021-3131-5
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved. ©KENICHI YAMASHITA,RIRI SAGARA 2018 ©2018 FIELD-Y
発行：フィールドワイ　フィールドワイ公式HPはこちら→www.field-y.co.jp
発売：メディアパル　ファルコムブックス公式HPはこちら→www.field-y.co.jp/falcombooks


英雄伝説
閃の軌跡06
原作／日本ファルコム
脚本／恵村まお　漫画／さがら梨々
A5判　160P　定価：本体991円＋税
ISBN 978-4-8021-3123-0
©Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.
©SAGARA RIRI 2018
好評発売中!!
エレボニア帝国に吹き荒れる陰謀の嵐！
時代が選ぶのは果たして誰か!?
そして友という絆に背を向け、
両雄相まみえる！
激動のクライマックス！
発行：フィールドワイ　フィールドワイ公式HPはこちら→www.field-y.co.jp
発売：メディアパル　ファルコムブックス公式HPはこちら→www.field-y.co.jp/falcombooks

第3話 思い出は色あせても



1

「いつも通りガラガラですねー」
店に思いっきり失礼なことを言ってから、ドロシーは奥の隅の席をひとつ陣取った。
注文を済ませると、腰のポシェットから買ったばかりの小さな結晶をテーブルに並べる。
ぜんぶで八つ。一セット分だ。
「さてっ、と……」
ひとつため息をついてから、親指と人差し指の間に挟み、その小さな結晶を天井から吊り下がっている導力灯の光にかざした。
虹色にきらめく結晶は感光クオーツと呼ばれる。たんなるクオーツではなくて、オーバルカメラで写した風景をこの中に記録することができる。
「こんな中に切り良く二百五十六枚分ですもんねぇ」
いったい、どうやって記録しているのだろう？
感光クオーツを眺めるたびに思うのだけれど、カメラマンでしかないドロシーには導力技術の理屈はさっぱりわからない。
「ん。傷は無いようです。これはオッケーっとぉ」
買うときに点検済みとはいえ念のためだ。右にある次の結晶を摘まんでは、明かりにかざして調べて左に置く。八つのクオーツを調べ終わったところで、胸元に『臨時』の縫い取りをつけたウェイトレスが食事を運んできた。
「ほら。うずまきパスタだよ！　こっちは黒胡椒のスープ。冷めないうちに食べな。伸びるとまずくなっちまうからね！」
「あ、はい。どうも」
「……声小さいね、あんた。顔色も疲れてるみたいだし」
「そ、そうでしょうか。あ、ありがとうございますー」
よし、と腰に手を当て、豊かな身体を揺らしてから、ドロシーより二十ほど年配のウェイトレスは厨房へと戻って行った。誰かを思い出すおおらかさと元気のよさだ。
「はあ……。ええと、いただきます、っと」
そう言いつつ、フォークをパスタに突き刺したところで動きを止める。
不安が心の内に込み上げてくる。
ドロシー・ハイアットは確かに疲れていた。
――果たして返していただけるんでしょうか？
思い返して憂鬱になってしまう。うずまきパスタをフォークに巻きつけたまま、ドロシーは呆けていた。そのまま何度も皿の上でるぐる回し続ける。
――もったいないですよぅ。

幾枚かの風景は二度と写せないものもあるのだ。
「もったいねえな」
「はい。もったいないんです」
「だったら食えよ……」
「はあ。確かにおいしい料理を写した場合などは、思わず食べてしまいたくなるものですけど、感光クオーツは食べられませんので」
「ちげーよ！」
　ぽかっと、柔らかい何かで頭をはたかれた。
「あいた。——え？」
　そこでようやくドロシーは視線を上げた。
　見知った男の顔が目の前にあった。丸めた新聞で肩を叩きながら、
「よう」
「ナイアル……先輩？」
「おう。どうしたよ。いつにも増してぼうっとしやがって」
「む。失礼ですよぅ。先輩、それじゃ、わたしが普段からぼうっとしてるみたいじゃないですか」
「してる」
「す、少しは否定してください！」

「事実だからな。あと、そいつもったいねえぞ」
「へ？」
　ナイアルが指で示した先に視線を動かす。フォークに絡ませたままぐるぐる回し続けたパスタからは、すっかり水気が抜けて、てろんと伸びてしまっていた。
「あー……」
　口に入れてから大後悔。
「ふにゃふにゃします。おいしくないですー」
　涙が出そうだ。薄給の身のゆいいつの楽しみが食事だというのに。

2

　ドロシーがナイアルと待ち合わせに選んだその居酒屋は《フォーゲル》という名で、工房都市ツァイスの西側地区にあった。
　ドロシーはパスタをなんとかたいらげて、冷めきったスープも飲み干した。ナイアルは、飛行船の中で夕食を済ませてしまったという。
「……なるほどな。カノーネ大尉に感光クオーツをぜんぶ取り上げられた、と」
「はい」

色々あったのだ。詳しくはどこかでゆっくりと話すとして、当面の問題は、感光クオーツを買い直したおかげで取材費が底を突きそうなことだ。慌てて王都の本社に連絡を入れたのだが、こうしてナイアル先輩が来たって事は……。

「追加支給が欲しけりゃ、記事を出せとさ」

「はあ……。やっぱりですか」

ナイアルが、ドロシーへの単なるお使いだけで街にやってきたとは思えなかった。薄々予感はしたのだけれど。

「記事……と申しましても～」

「文章は期待してねえよ。そっちは俺が書く」

「だから、クオーツは取り上げられてしまってですね」

「あのな」

ナイアルが頬杖をつきながら、ドロシーに諭すように言ってくる。

「何も展覧会で一席を取るような写真を出せなんて言ってねぇよ。ツァイスに来てから、あちこち見て回ったんだろ？　写真は残ってなくても、気に入った風景のひとつやふたつあるだろ？」

「あ、それはもう色々」

「その、覚えてるやつの中から、適当なところにもう一度行って……」

「写真に撮ったところなら覚えてますけど、ぜんぶ」

そう返したら、ナイアル先輩が変な顔をした。目を細めながら、ドロシーのほうに疑うような視線を投げて、

「は？　おまえ、何言ってやがるんだ？　今までいったい何枚撮ったんだよ。千とか万とかじゃきかないだろ？」

「クオーツひとつで二百五十六枚です。八つで一セットで、ええと……二〇四八枚かな。リベール通信社に入って、これが十セット目ですから、そうですね、約二万くらいでしょうか。先輩、正解！　さすがですー！」

「そりゃどうも——じゃねえよ！　それぜんぶ」

「覚えてます、けど」

「景色なんて似たり寄ったりじゃねえか、そこまでしっかり覚えてるわけ——」

「いえ」

すこし声が強くなったので、ナイアル先輩が言葉を止めた。

「わたし、どうでもいい風景なんて撮ったことがないので」

「——っ！」

絶句された。

——そんなに変なことを言っただろうか？

「証明しろと言われても困っちゃいますけどねー」
　ドロシーは今までに写した二万枚近くのすべての風景を一枚残らず細部まで思い出すことができたが、それを伝える術は持たない。話して聞かせることも、絵に描いてみせることもできない。
　それができたら、カメラマンになどなっていないだろう。
「相変わらず、写真のことになるととんでもねえな……」
「そーでしょうか？」
「まあ、そのことは置いておいてだ。ツァイスの記事が欲しいんだから、こっちに来てからでいいんだよ。特集記事に使えそうな写真のネタを探しておけって言ったろ！」
「あー。そうでしたそうでした」
「忘れてたのかよ⁉」
「いえいえ。ちゃんと喉元まで出かかったところに覚えておきましたとも」
「忘れてたんだな……」
「あっ、そうか。思い出しましたー」
「いい景色があったか？」
「いえ、そっちの話ではなく」
　先ほどのウェイトレスのおば――おねえさん。会話をしていて何か覚えのある感覚がしたと思ったのだ。温泉の女将さんを思い出したからだ。
「温泉？」
「はい。わたし、取材の拠点に温泉宿に泊まりまして」
「ほう？」
「ご飯もおいしくて、東方風の造りの内装も素敵でした～。ゆったりのんびりの露天風呂なんですよぅ。湯上りのフルーツ牛乳がこれまた最高なんです！」
「いいねえ。詳しく聞かせてみろよ」
　と、先輩記者に促されて、ドロシーは記憶をさらい始めた。

3

　ツァイスの南にある旅館《紅葉亭》。
　そこにはとても元気のよい女将さんと風情のある温泉があった。
　撮影旅行の拠点にするにはとてもよいところ。
「で、荷物を置いてからカメラを持って街道を戻ったんですけど。街道沿いには、こうピンとくるような景色がなくてですねー。平原道から外れてネタを探していたところ、実はちょっと野犬に食べられそうになりまして」

ガタッ、とナイアルが椅子から腰を浮かせて、驚いた顔になった。
「お、おまえ――」
「あ、だいじょうぶです。というか、だいじょうぶじゃなかったら、わたし、ここにいませんってば。今頃ワンちゃんのお腹の中ですー」
「お、おう。そうか。そうだよな……って、やめろよ、想像しちまうだろ」
「はあ」
「まあ、助かったんなら良かったけどな」
「偶然ってあるんですねー。通りかかったエステルちゃんたちに助けられまして」
「あの見習い遊撃士コンビにか？」
はい、と頷く。
すっかり馴染みになった遊撃士のふたり、エステルとヨシュアは、ティータという少女とともに、《紅葉亭》のポンプの修理をするためにツァイスの街から宿にやってきたのだ。
「あいつらもここにいるのか……」
「不思議な縁ですよねー」
修理道具を持って旅館に着いたエステルたちは、女将さんから頼まれて、ドロシーを迎えに来てくれたというわけだった。
「間一髪でした」

「まあ……おまえさんがどうにかなるとかちっとも思ってはいなかったけどな」
「それにしては焦っていたようですが」
「ちげーよ。犬が腹を壊さねーか心配したんだよ！」
「むっ、失敬な。それはないですよぅ。先輩だって、常日頃から言ってるじゃないですか」
「へ……？　俺なにか言ってたか？」
「おまえは天然だって。そこらの加工品より新鮮ってことでしょう？　おなかを壊すなんてそんな……」
「天然の意味がちげぇ……」
ナイアルが、げっそりとした顔になってため息をついた。
ドロシーは先輩記者の顔を見返しつつ――いえ、そこまで本気に呆れられると今さら冗談でしたと言いにくいのですが――旅館の女将さんのことを思い返していた。
いつもニコニコしていて、大きな声で、旅館に泊まるひとりひとりに対して、とても丁寧で思いやりあふれた応対をしてくれた。
それなのに、満足にお礼も言えずにツァイスに戻ってきてしまった。
あのときは出発してしまったエステルたちを追いかけるのに夢中だったのだ。
――心配かけてしまったんですよねぇ。
「何かお礼をしたいですねぇ……」

ドロシーのつぶやきを聞き取ったナイアルが「何がだ?」と尋ねてくる。
相変わらずだ、とドロシーは思う。
ほんとに大事なときには、このひとは聞き逃したりしないのだ。
「実はですね……」
ドロシーは旅館《紅葉亭》の女将さんについて話して聞かせる。
世話になったこと。心配をかけてしまったのに、ロクに礼も言えなかったこと。
「なるほどな」
「いちおうお詫びを言って、お礼をしようとしたんですけど……。『あんたが無事だったんだからそれで充分さ。別にいいよ』と。その言葉に甘えてしまった格好なんですけれど」
「今になってみると、もっと何かできないかって思えてきたわけだな?」
「はい」
ナイアルの言うとおりなのだった。
「じゃ、聞いてみるか」
と、椅子から腰を浮かせながらナイアルが言った。
勘定をテーブルに置きながら——珍しいことにおごってくれるらしい——どこかに行こうとする。
ドロシーは慌てて追いかける。

「ちょ、ちょっとセンパイ!」
居酒屋の扉を開けて出るナイアルに息を切らしながら追いついた。
「き、聞いてみるって?」
「その女将さんにだよ。もう一回聞いてみりゃいいだろ。お礼をしたいのですが、何か欲しいものはありませんか、ってな」
「これから旅館まで行く気ですか⁉」
「バカ。もう夜になるぞ。街道を歩いたって夜の旅は俺たちだけじゃ無謀だ。文明の利器に頼りゃいいだろが」
「あ……」
言われて思い出した。
そういえば、あの旅館には導力利用の通信器があったはず。
遊撃士協会か、中央工房あたりの通信器を借りれば連絡が付けられるのではないだろうか。
そうか、その手があった。でも——。
「あの……でも、通信器って、確かミラが……」
「経費だ、経費」
「け——」
「そうなるはずだ。俺が立て替えてやるよ。まあ、やってみりゃわかる。どうせ、おまえので

きるお礼なんて決まってるんだからな」
――はて、どういうことでしょう？

4

中央工房の通信器を借りて、《紅葉亭》の女将、マオ婆さんと話ができた。
最初はお礼なんていいいと断り続けたマオだったが、ドロシーの熱心さに負けたらしく。
そうだねぇ。前から思ってたんだけどさ、と前置きをしてから、ドロシーに告げた。
通話を終えてからナイアルに伝える。
「旅館に泊まってくれたお客さんに、宿泊の記念になるものをあげたいけれど、何にしたらよいか悩んでいる。何かいいものを思いついたら教えてくれ――だそうです。お礼ならそれでいいって」
ナイアルは、予想通りという顔をしながら、ドロシーに向かってにやりと笑う。
「先輩……何か思いついてます？」
「ああ。おまえ、得意だろ。そーゆーの」
さっぱり判らない。
「ヒ、ヒントくださいい。ヒント！」
「すこしは自分の頭で考えやがれ！」
「ひーん。わたしの得意なことですかぁ？　うーんうーん。でも、わたしが少しでも得手なことって写真くらいで……写真、ですかぁ？」
「そう、それ」
「あ、わかりました！」
「そいつでいこう！」
「温泉旅館で湯煙りナイアル先輩の水着ブロマイドです！」
「ちげーよ！」
絶叫レベルで叫びながら、ぺし、と頭をはたかれた。
工房内で大声を出したものだから、まわりの技師たちからも睨まれた。気まずい。
そそくさと工房から立ち去りつつ、
「冗談ですよぅ」
「おまえのは冗談に聞こえねーんだよ！」
「はあ。じゃあ、あのええと、記念写真……ですね？」
「そのあたりだろ。最近じゃ、写真をそのまま通信紙にするって商売もあるらしーぜ。表が風景とかの写真で、裏にメッセージを書けるとかいう」
ポストカードのことだ。

なるほど、とドロシーは思う。女将さんはツァイス地方の旅行者に思い出になる品を渡したいわけだから、ツァイス地方の風景写真をカードにしたら、ぴったりなのではないだろうか。
「記憶の中の思い出はいつか色あせる。けど、感光クオーツに刻まれた風景は残る」
「はあ」
「色あせない思い出を切り抜いてみせるのは、おまえ得意だろ？」
「得意、なんでしょうか？　できるかなー」
「できるかどうかはどうでもいいんだよ。やるかやらないかって話だ」
「………やります」
　ドロシーは心の中でもう選んでいた。他の選択肢はない。
　ナイアルだって判っていたのだろう。よし、と頷くと、丸めた新聞でドロシーの頭を今度は軽くぽんと叩いた。元気づけるように。
「明日から、おまえはツァイスの絶景写真を撮る。おれはその様子を記事に書く。ほれ。これで仕事になったろ。通信費の元は取れるぜ」
「先輩。その最後の台詞でイロイロ台無しですよぅ」
「俺だって、イロイロ忙しいんだよ！　さっさと今追っかけてる事件に戻りてぇんだ」
「お世話になります」
「じゃ、明日から出るぞ。で、どこ行く？」

「そうですね……。やっぱり旅館に近いところの絵がいいと思うんですけど」
　明くる日。ドロシーとナイアルはトラット平原道を南へと歩いていた。
　温泉宿のあるエルモ村を目指しつつ、少しでも良い風景を探すために。
　だが――。
　街道から撮れる風景というのは、ようするに旅人ならば誰でも見れる風景であって、いまいちドロシーの心に響かない。
「まあ、だからこそあのときも、ちょっと離れた森のほうまで歩いてみたんですけど」
「だめだ」
　ナイアルがにべもなく首を振った。
　お互いに旅人として最低限の装備と荷物を整えての道のりとはいえ、街道を外れればそこは魔獣の行き交う地なのだ。危険すぎる。ましてやドロシーは一度野犬に絡まれている。
　ナイアルが慎重になるのも仕方ないだろう。
　遊撃士の護衛でもいれば別だったが……。
「とはいえ……これはどうにも」
「どこが気に入らねーんだ？　いい景色だと思うがな」
　トラット平原は起伏もなめらかで緑豊かな地だ。ときおり左右に森を抱く丘が見えるものの、

エルモ村までの道には障害になるようなところもない。
平原のそこそこで、色鮮やかな野の花が自然の花畑を作っていた。
「風も気持ちいいし。のんびり歩くにはもってこいのところだよなぁ」
「でも、……トラット平原ならでは、って感じではないかと」
ドロシーが言うと、ナイアルは納得したとばかりに頷いた。
「なるほど。確かにどこにでもありそうな風景っちゃぁ、風景だわな」
「ですよねー」
何か、トラット平原ならではの個性が写真に欲しいのだ。
そうすれば、この地方に来た旅行者にとって得難い思い出の品となるだろう。
けれど——ツァイス地方の名物っていったい何だろう？
考えこみながら歩いていたら、どきりと心臓が跳ねた。
びっくりして驚いた理由を思い返し、直後に理解した。
声が聞こえたからだ。

キエィ！　エヤア！　トゥ！

そんな感じの叫び声がほら聞こえてくる。叫び声というか、掛け声だ。

近くの森の中からだった。
「なんだあ？」
「先輩、行ってみましょうよ」
「お、おい！」
いちおうは止めるポーズを取ったものの、結局、ナイアルもドロシーの後をついてくる。
最後は好奇心が勝つのが、記者であり、カメラマンなのだから。
用心しつつも森に分け入り、そうして声の聞こえるほうへと歩いて行って、ドロシーは開けた草地で行われている戦いの現場に到着した。
見たことがある男が白い獣と戦っていた。

5

おりしも日は中天にあり——。
輝く日差しが丸く開けた草地の緑を輝かせている。
男のほうは熊のように大きな体格をしていた。東方風の胴衣を羽織り、こちらに背を向けてやや腰を落として構えている。武器らしきものは持っていない。
「格闘家か……」

ぼそりとナイアルがつぶやいた。おそらくそうなのだろう。ドロシーはこの男とすれちがったことがあるのだけれど、そのときエステルが言っていた。かなりの武術の腕があるようだ、と。

そのエステルがいた。

ヨシュアとともに、熊のような男を遠巻きにしている。向こうもドロシーたちに気づいたようで、こちらをちらりと見て、軽く手を振ってから視線を戻した。

「あっちの妙な野郎はなんだ……」

「ヒツジンですねー」

熊のような男と対峙して睨みあっているのはヒツジンと呼ばれる魔獣だった。

見た目が羊とそっくりなためにそう呼ばれる。

もこもこした白い毛並みも、頭の左右に生えた曲がった角も羊と変わらない。つぶらな黒い目をしているので、黙っていれば可愛らしい生き物だった。

だが、こう見えてヒツジンは好戦的なのだ。

二本の後ろ脚で立ち、二本の腕、というかひづめを武器にして襲ってくる。

ヒツジンは、トラット平原ではありふれた魔獣であるため、ドロシーも何度か遠目で見たことがあるのだが、目の前の白いヒツジンはかなり大きいほうだ。

熊のような男に負けていない。

過去の激しい戦いを物語るように右の角が半ばほどで不自然に折れていた。

涼やかな風が吹いた。

梢がさやさやと音を立て、ふたり――男とヒツジンの間に、木の葉が一枚、はらりと舞って過ぎていった。

それが合図だったかのように両者が動いた。

一気に双方が間合いを詰める。

裂ぱくの気合とともに、男の両腕がヒツジンの身体に向かって何度も動く。

速すぎて目で追えないほどだ。

だが、ヒツジンも負けてはいない。同じくらいの速さでひづめを繰り出している。

バシッ、バシシッ、と打撃の音が掛け声とともに空気を震わせる。

拳をひづめで防ぎ、ひづめを拳で防ぐというハイレベルの攻防だ。両者とも、何度も打撃を繰り出しているのに、わずかのところで身体に当てさせていない。

「セセセ、センパイ！」

「互角、か……」

ナイアルの言葉とともに、両者がふたたび間合いを広げた。

「お前さん、やるねぇ……」

男の低い声のつぶやきが風に乗って聞こえてくる。

ヒツジンのほうも、何かつぶやいたようだ。さすがにドロシーでは何と言ったかわからない。

そもそも、言葉を話すのかわからないし。
片角のヒツジンがドロシーたちのほうをちらりと見た。
くるりと背中を向ける。
そのまま去っていった。
誰も追わない。
「ヨシュアくん、エステルちゃん、ええと、それから……熊さん！」
ナイアルとともに駆け寄りながら声をかける。
熊のような男が振り返り、ドロシーを見て言った。
「おいおい誰が熊だって……ああ、あんたか。たしか、前にもこのあたりであったな。このふたりと一緒にいたお嬢ちゃんだ」
「はい。ドロシー・ハイアットですよ〜」
「ドロシー、どうしたのよこんなところで。また道に迷ったとか」
「エステルちゃん……またって……」
あのときだって撮影場所を探していただけで道に迷っていたわけではないのだが。
「ヒツジンとかいうあの魔獣、逃がしてよかったのか？」
ナイアルが尋ねて、熊のような男がにやりと笑みを浮かべて言った。
「ああ。問題ない。襲われていたわけじゃなく、稽古をつけていただけだからな」
答えを聞いて、ぽかんとナイアルが口を開けた。ドロシーだって、同じだった。稽古だって？
ドロシーたちの様子を見て、ヨシュアが苦笑しつつ提案してくる。
「まあ、こんなところで立ち話もなんですから、場所を移しませんか？」
ヨシュアくんってば、気配り上手は変わってないな、とドロシーは場違いな感想を持ってしまった。

6

街道から少しはずれた木陰でドロシーたちは少し遅い昼食を取ることになった。
エステルたちも食事はまだだったようで、釣った魚を焼き、清水を沸かして簡単なスープを作る。ドロシーたちは街を出たばかりだったのでお弁当を持っていた。それをエステルたちと分け合う。
「はい。にがトマトサンドをおひとつどうぞー」
「これ結構苦いのよねー」
「でも栄養たっぷり……だそうですよぅ」
「うー。苦いよう！」
「無理しなくてもいいんじゃない？　エステルが好きな食べ物って、オムレツとかハンバーグ

とか、基本的に子ども向けのものばかりだから、こういう苦みの効いた大人向けの料理は合わないと思うよ」
「……む。何よ、あたしが大人の味を理解できないっての⁉　に、にがトマトのひとつやふたつ、このエステルさんにかかればイチコロよ！　えいっ！」
がぶりと大きく噛みついて、涙をぽろぽろ流すのだった。
「……だから無理しなくていいって言ったのに……」
「うー」
──どっちが年上なのやら……。
ドロシーはこっそり微笑んでしまう。
涙目を隠しながら無理やり食べるエステルと呆れ顔のヨシュアに、相変わらずだなと懐かしいものを感じてしまう。それでも、ふたりとも最初に会った頃と少し雰囲気が違ってきている気がした。仲の良い姉弟だとは思っていたが、なんとなくそれ以上のつながりのようなものを感じる……。
その間に、ナイアルと熊男も互いに挨拶をしていたようだ。
「ジン・ヴァセック……って、あの共和国を代表する遊撃士、《不動》のジンじゃねーか‼」
「有名かどうかはわからんが、遊撃士ではあるな」
「熊さんじゃなかったんですねー」

そりゃそうだろうと、今度はドロシーがナイアルに呆れられた。
それからお互いに近況を報告しあった。
明るく振る舞ってはいるものの、エステルとヨシュアが立て続けに事件に巻き込まれている最中なことをドロシーは知った。それもどうやら、オーブメント絡みの事件らしい。詳しいことは話してくれなかったが。
ナイアルは関心を示したが、エステルたちの口が堅いことを見てとると諦めたようだ。
もとより無理強いするような性格でもない。
話題は先ほどの魔獣との戦いになった。
「旅の途中だったが噂の御仁と手合せしたくなってな。無理を言って寄ってもらった」
「街道沿いの旅人の間で有名になってるんだって。ツァイスのホテルで聞いたんだけどね」
エステルが話の補足をしてくれる。
「はあ。格闘家のヒツジンさんですかぁ……」
ようするに、こういうことらしかった。
トラット平原のヒツジンの中に格闘好きな一族がいるらしい。そしてその一族の中で、あの片角のヒツジンは、他の仲間たちの倍ほども大きく、力ももっとも強いという。
「俺も武術家のはしくれだからな。一番強いと聞いて居ても立ってもいられなくなった。なん

としても手合せしてみたくなった」
「強い奴に会いたくて、こんな森の中にまで来てたってのか？」
「ああ。おかしいか？」
「……おかしいっちゃ、端から端までおかしい気もするが、まあ、そもそも格闘家なんてのはおかしなやつらばっかりだからなぁ」
「ちょっと待ちなさいよナイアル！　それはゼムリア中の武術家に対する挑戦と受け取るわよ！」
「エステル、少し落ち着いて……」
「ヨシュアは黙ってなさい！　ナイアルってば、あたしの事もおかしいって言ってるんだから！」
「……うんまあ」
「おかしいだろ」
「おかしいですねー」
「まあ、お嬢ちゃんがふつうじゃないことは俺も認めざるをえんな」
「あんですってぇぇえーーーーー！」
　激昂するエステルをヨシュアがなだめる。それをしり目に、ナイアルが重ねてジンに尋ねたところによれば、確かにあのヒツジンは極めて強かったらしい。

　おそらくはそれなりの激しい稽古を重ねているはずだと言った。
「あやつは武の道を志すものと同じ瞳をしていた。肩慣らしのつもりだったがな。つい本気になっちまった。拳を打ち合わせた今、あいつはもう俺の強敵（とも）だ」
　きっぱりとジンが言って、肉体言語が苦手なナイアルが「そ、そうか」と若干ひきつりながら頷いていた。
　格闘家理論は種族の差まで飛び越えてしまうらしい。
　――にしても、ヒツジンと友情を結んでしまうとは。このジンという男の人はただものではない気がします。
「あ」
　ドロシーは思わず声に出してしまった。
　――思いついた！
　ヒツジンといえば、トラット平原やリッター街道で多く見かける魔獣だ。
　つまり、この地方の名物と言っていい。
　確かに好戦的でおっかない魔獣として知られるものの、見た目だけは愛らしく可愛いことでも有名だった。そして、あのヒツジンは……、このジンさんのトモダチだという。
　――こ、これは使えるのではないでしょうか！
「あ、あのぉ～。熊のジンさん」

「熊じゃないが、なんだい？　お嬢ちゃん」
「じゃあ、熊じゃないジンさん。あのですねー」
「おう」
あのヒツジンが本当にジンの言うとおり、たんなる魔獣ではなく、近寄っても平気なヒツジンであるならば……。
もしかして、世にも珍しいヒツジンの全身写真が撮れるのではないか。
ドロシーはそう思ったのだ。
ヒツジンの全身ブロマイド、ツァイスの風景つき。それならば充分にツァイス地方ならではの思い出と言えるかも……。
「ちょっとしたお願いがあるのですが、聞いていただけないでしょうか……」
いい案に思えたのだ。そのときは。

けれども――。

7

理由を話してジンの協力を取りつけることには成功したものの……。
肝心のヒツジンに出会えなくては計画も絵に描いた餅だった。

西空に傾きつつあるお日様を見てジンが「では、明日だな」と言った。
「はい……」
「済まねえな、こいつのわがままにつきあってもらって」
「なに。人の助けになるのが遊撃士の役目だ」
「ごめんね。あたしたちも用事がまだ終わってなくて」
「いいんだよ、エステルちゃん。あたしこそ、無理言ってごめんなさいだよー」
トラット平原道の分かれ道に立って、ドロシーたちは互いに頭を下げあった。
昼食後に、ドロシーたちはあの片角のヒツジンを探して街道沿いの森をうろうろと歩き回ったのだが、出会うのはふつうのヒツジンばかりだった。
ふつうのヒツジンは写真を撮らせてくれるどころではない。
血気盛んで問答無用に襲い掛かってくる。
幸い、こちらには遊撃士が三人もいたから、ケガのひとつもすることもなく撃退できたものの、ドロシーの望むような写真は撮れずじまい。
時間ばかりが過ぎ。そしてエステルたちとて、そこまで暇ではない。
さすがにこれ以上は付き合わせるのも悪くて……。
「俺だけちょいと抜けて、明日もここまで来る。まあ、夜には戻って合流するってことでいいか？　エステル、ヨシュア」

ジンだけは、そう言って、明日、もういちどドロシーたちに付き合ってくれると約束してくれたのだ。
「僕たちもお手伝いをしたいところなんですが……」
「いや、その時間があったら、お前さんたちはツァイスに戻っていたほうがいい。だろ？」
「うーん、それはそうだけど……」
「エステルちゃん、そうしてくれていいよ」
「そうそう。そこまで甘えられねーからな。ほんとは俺たちだけで済ませなきゃいけないところだ」
ナイアルもそう言った。もっともだ。
それにしても付き合ってくれるというジンさんにはすごく感謝してしまう。
――いい人だなぁ。
「あの、あまりたいしたお礼できそうもないですけどぉ」
「なに気にするな。俺もあいつとはまだまだやりあってみたいしな」
「ジンさん、強い相手が大好きなのよねー。男の子ってみんなそうなのかな？」
言ったエステルだったが、ふと、隣のヨシュアを見て、
「そうでもないか」
「……それは喜んでいいのか、男としては悲しむべきところなのか迷うところだね」

「ヨシュアらしいって言ってるんだってば！」
「……まあいいけど」
別れる直前にも相変わらずのやりとりだ。思わず心がほっこりしてしまう。
ドロシーは最後にもういちどだけ頭を下げる。
「じゃあ、あの……ジンさん、明日もよろしくお願いします」
「おう。任せておけ」
別れてからエステルたちは東に向かって歩いて行った。ヴォルフ砦のほうだ。どんな用事があるのかまでは聞いていない。
ドロシーとナイアルは南へ。
今夜は《紅葉亭》に泊まることになっている。急げば日が暮れる前に到着できる。
黄金色に染まりつつある平原道をドロシーたちは進んだ。
真っ赤なお日様が丘の向こうにゆっくりと降りてゆく。
昼の暑さは和らぎ、黄昏時の爽やかな風が草を寝かし、髪を揺らして通り過ぎてゆく。風の流れに合わせて動いてゆく草波の縞模様がきれいだった。
エルモ村が見えてきて、《紅葉亭》に着いた。
わずか数日前に来たばかりだというのに何故か懐かしい。
入口をくぐると、マオ婆さんが大喜びで迎えてくれた。

宿泊手続きをしながら話す。
「あの……、昨日のお電話で言っていたお礼ですけれど」
「おや。そんなに無理しなくていいんだよ。思いつかなかったら、そのまま忘れておくれ。なあに、思い出の品なんてなくたって、この旅館に泊まってくれたひとたちが『ああ、いい湯だった』って言ってくれたら、あたしゃそれで充分だよ！」
「あ、いえ。その……思いついたのは思いついたんです、けど」
写真を提供するから、ポストカードにしてはどうか、と伝える。
マオ婆さんは驚いた顔をしてから、にっこりとほほ笑んだ。
「そりゃあいい案だね。あんたの撮った写真、見てみたいと思ってたんだ」
「今日はまだ撮れてないんですけどぉ」
「そんな顔しないでいいよ。のんびりやってくれたらいいさ。ほら、温泉にでも入って温まっていっておくれ。ここは疲れを癒すところだからね！」
おっきな声で言った。
「じゃ、ひと風呂、浴びさせてもらうかな」
ナイアルが遠慮なく言った。
ふたりして荷物を部屋に預けてから温泉に向かう。長い廊下は、東方風にすべて木の板でできていて、足の裏に心地よい。心が落ち着くっていうのかな。

「あ、ナイアル先輩」
風呂の入り口が見えてきたところで、ひとつ思い出した。
「ん？　なんだよ」
「あの……奥に露天風呂があるんですけれど」
「おう。言ってたな。楽しみだぜ」
「どちらが先に入るか決めましょう。さあ、勝負です！」
右手を前に出して、拳を見せる。手で、石と紙とハサミを作って、勝ち負けを決める子どもから大人までできる公平な勝負だ。
「ちょ、ちょっと待て、おい！　なんで勝負だよ！」
「そうしないと一緒に入ることになります」
「…………へ？」
「ここの露天、混浴なんですよー。いえ、先輩と後輩と言えば家族も同然。気にしないといえば気にしないのではありますが、いちおう先輩を先にするのが礼儀という気もしますし。とまあ、ごちゃごちゃ考えるよりは、さあ、勝負！」
ドロシーの言葉がナイアルの耳にようやく届いたところで、ものすごい勢いでナイアルの顔が明後日のほうを向いた。
「さ、先に入りゃいいだろ、先に！」

「いいんですか?」
「好きにしろ!」
　怒った声で言われて、ドロシーは首を傾げた。はて、何か怒られるようなことをしたでしょうか、と。だが、鼻をくすぐる硫黄の匂いに気づくと、浮かんだ疑問も文字通りに雲散霧消してしまった。
　温泉だ!
　そして、湯上りはフルーツ牛乳だ!
「では、センパイ、遠慮なく〜」
「お、おう」
　まだあっちのほうを向いているナイアルを残して、ドロシーは東方風の布のカーテンをくぐって脱衣所に入る。幸い、他の客は来ていない。ということは、今ならば露天のほうも貸切ということだ。
「これはらっきーですよ〜」
　あっという間に衣服を脱ぐと、外へと続く扉をくぐる。
　外気にさらされて、身体がぶるっと震える。明かりがあるから足下は辛うじて見えるものの、空はもう真っ黒だった。明るい星が見えている。
　洗い場でざっと身体を流してから露天風呂に飛び込む。

　飛び散る湯が周りに生えた草を濡らした。
　じん、と湯の熱さに肌がしびれたようになる。それも一瞬のこと。すぐに身体全体が緩んでくる。
「はあああああ」
　思わず長く息をついていた。
「女神さま。われらに温泉を与えてくださいましてありがとうございますぅ」
　思わずお祈りまでしてしまう。

　肩までつかって、一から数えて百まで。
　身体の芯まであったまるべく数を数えて、九十八までできたところで。
　ドロシーの耳がわずかな音を捉えた。
　がさがさ、と葉擦れの音が聞こえた。
　振り返る。
　闇に目をこらして、その奥を見透かそうとした。
「だ、だれ……か、そこにいますかあ?」
　声をかけてみる。
　何も返ってこなかった。その代り……。

「これ……血の匂い？」
ぞくりと肌が粟立つ。いったい、これは……。
「もーし。誰かいるんですか。あの、応えてくれないと、人を呼んじゃいますよぅ」
洗い布を身体に巻きつけ、そう言った。
何も返ってこない。
血の匂いも消えなかった。
かすかに呻き声のようなものが聞こえてきて、ドロシーは決意する。
——ちょっとだけ、様子を……。
湯船からあがり、音のしたほう、宿の外とを隔てる木立のほうへと歩いてゆき。
ドロシーはそこに倒れている人影を見つけた。
いや——ちがう。
人と良く似た姿形をしているが人ではない。
かすかに漏れてくる明かりの中、その者の姿が辛うじて見て取れる。
全身がもこもこした白い毛で覆われていた。
頭の両側に丸まった角。片方は半ばで折れていた。
「こ、このかたは……！」
身体の下から地面へと黒い液体が広がっている。

——血だ！

倒れていたのは、全身に大怪我を負った格闘家ヒツジンだったのだ！

8

ドロシーは辛うじて悲鳴を呑み込んだ。
とっさの判断だったけれど正解だったと思う。叫んでいたら、宿をひっくり返す騒ぎになっていたはず。
ここは外庭に造られた露天風呂。
確かに木の柵の向こうは森となっていて、裏山へと繋がっているのだけど……。
薄い板張りだけの境とはいえ、目の前で倒れている魔獣はいったいどうやって入ってきたものやら。
だが現に片角のヒツジンは血まみれとなって数歩先に倒れているのだ。
口許に当てていた手をドロシーはゆっくりと胸元へと下ろす。
一歩ずつ。
倒れている片角のヒツジンに近寄る。

ヒツジンがかすかに目を開けた。
——あう。
足が止まってしまう。ひやりと背筋が冷えた。ここで飛び掛ってこられたら、とてもじゃないけれど助からない。相手は魔獣にして凄腕の格闘家で、ドロシーは薄い洗い布一枚を身体に巻きつけただけの姿なのだ。
ヒツジンは黒目がちの瞳でドロシーを見つめてきて、かすかに頭を起こそうとした。けれども、一度は開いた瞳が力なくふたたび閉じられてしまう。
「大変です……」
最後の距離を駆け寄って、ヒツジンの身体を確かめる。全身に傷をおっていて、いまだに血が止まっていない。
止血が必要だ。
「乾いた布！」
それと薬草だ。確か、旅行用の応急手当のセットが旅行鞄の中にあったはず。
人間用だけど。
この際、そんな些細なことを気にしてる場合じゃない。
相手は同じ二足歩行の生き物なのだし、ジンさんと戦ったほどの格闘家だし、人間用の薬だって効くかもしれないじゃないか。たぶん。

「待っててください。いま、お薬とってきます！」
押し殺した声でそう言って、ドロシーは踵を返した。
身体をくるんでいた洗い布を魔獣に掛けていかないだけの落ち着きは残っていた。恥ずかしいから、ではない。濡れた布が風に当たると水気を失い急激に熱を奪うのだ。けれど、薄い布一枚でも身体をくるんでいたのが、安心感に繋がって、それが返って仇になったのかもしれない。
それとも、思った以上に動転していたか。
洗い場を越えて、脱衣所を越えて、東方風の布のカーテン越しに「センパイ！」と叫んだ。
「どうし——なっ！」
切羽詰った声に、ナイアル・バーンズが慌てて飛び出てくる。
「へ？　あ！」
洗い布一枚で身体をくるんだだけ、濡れた髪のまま廊下でドロシーは「しまったぁ」と思わず声をあげてしまう。
ドロシーの姿に驚いてすっころんだナイアルが後頭部を床で強打した。
目を回している。
——無駄に怪我人を増やしてしまいました……。

9

露天風呂は男湯からも女湯からも繋がっている。
それが幸いした。ドロシーは応急手当のセットを部屋から持ってきて、裏庭のここでナイアルと待ち合わせた。
傷ついているとはいえ、さすがに魔獣を宿の中に運ぶわけにもいかなかったからだ。さりとて、ドロシーにはそのままヒツジンを見捨てることもできなかった。
毛についた血をぬぐってやり、傷痕を水で洗い流す。ひどかったのがお腹の傷で、深く、えぐれたようになっており、麻酔などない中で、ナイアルが裁縫用の糸と針を使って縫い合わせなくてはならなかった。
ろくな明かりもない中で。
——先輩、お針子になれます！　すごい器用。
痛かったろうに、ヒツジンは時折りうめき声をあげるだけで我慢した。
「こいつは獣と戦った傷だな」
ナイアルが言った。
「獣、ですか」
「でかい角でひとつき、ってところだ。《不動のジン》と互角に戦った奴をここまで手ひどく痛

めつける獣ってのが気になるが。大型の魔獣あたりか。っと、よし！　おい、布！」
「は、はい！」
縫い合わせている間にも滲み出ていた血を乾いた清潔な布でぬぐう。《紅葉亭》の飾り文字が躍る東方風の拭き布がたちまち血で染まってしまった。
——これは洗って落ちるでしょうか……。
手持ちの布は尽きてしまったから仕方ないが、買い取らないと女将さんに申し訳ない気がする。
傷に効く軟膏を塗ってやり、薬草を貼り付けたまま包帯を巻く。
もこもこした毛並みが邪魔をするところは、可哀想だがいくらか毛を刈り取らなければならなかった。羊という動物は毛を刈ると、とても情けない姿になる……。いやこれは羊じゃなくて、ヒツジンだけど。
ひととおりの手当てが済むと、ナイアルとふたりがかりで抱えあげて、やわらかい草地の上に寝かせた。
ヒツジンは黙ってされるがままになっていた。
「もう、暴れませんね……」
「覚悟したってことだろうな」
声を潜めて語り合う。

ナイアルを連れてドロシーが戻ってきたとき、片角のヒツジンは警戒したのだろう。最初は近づこうとするふたりを追い払うような仕草をしたのだ。
懸命にやわらかい声を出してなだめた。
言葉が通じたとは思えない。力尽きたのだ。両腕を振り回していたヒツジンだったが、ひと声大きく唸ってから、がっくりと力を抜いた。
で――応急手当へとこぎつけたわけだ。
今は目を閉じて黙ったまま寝ている。少し、呼吸も穏やかになったような気が、する。
「まあ、今夜が峠ってやつだな。血はなんとか止まったみてえだし、朝までひどくならなけりゃ、命は助かる」
「よかったですよぅ」
――ひと安心です。
ほっと安堵の息をついた。
それにしても……。
「どうして、こんなところに逃げて来たんでしょう」
周りが森だとはいえ、ここは村の中だ。つまり人里だ。魔獣といえども、傷ついている身体では近寄りたくないだろうに。
「匂いだな」

「……へ？」
「この腐った卵みてえな匂いだよ」
「……温泉の？」
そうだ、とナイアルが頷く。
「どこだったかな。場所は覚えてねえが、山の中の温泉に猿とか獣が入りにくるってぇ記事を読んだことがある」
「へー」
「人間だって、湯治に来るだろ」
「そうです、けど。じゃあ、温泉に入りにきたんですか、この子？」
「本能だろうけどな」
考えてのこととは思えない。止血もせずに、血を流したまま湯船に浸かることなどできないわけだし。そうナイアルは言った。
「はあ」
頷きつつ、つい、ドロシーはヒツジンがタオルを頭に乗せて湯に浸かっている姿を想像してしまった。
ついでに想像の中で横にジンさんを並べてみた。
ふたりして鼻歌なんか歌ってたり。

「……ほう。なんだか、ほのぼのですよー。
「いや、そんなことを考えている場合ではないのでした！」
「叫ぶな。頭いてえんだから」
　ナイアルが頭に貼った湿布を手で押さえた。廊下で強打したところだ。大きなこぶになっている。
「ああ。もうしわけありません」
「まあいいけどな」
「見られたのでおあいこってことで」
「見てねえ！」
「先輩、うるさいですよぅ」
「……おまえな」
「冗談ですよ？」
「判ってるっーの」
　草地にふたりで座り込みながら、そんな軽いやりとりを交し合う。魔獣相手に医者の真似事をしていた緊張感から解放されたせいか会話になってない会話だったり。
「ま。確かにここでうるさくしてると、治るものも治らねえし。静かに寝かせておいてやろう」
「ですねー」

10

　立ち上がってふたりして宿のほうへと向かった。
　茂みが邪魔をしてその草地は旅館の中からは見えない。意識を取り戻せば、そのまま逃げられる場所だ。そっとしておくほうがいい。
　とはいえ……このまま放っておく、というつもりはなかった。
　ヒツジンの傍を離れつつ、ドロシーはナイアルと互いに目配せをする。
　どうして、あんな傷を負ったのか。
　ふたりは突き止める気になっていた。
　それに捜していた相手なのだ。ここで別れたら、もう見つけられないかもしれない。

「動いたぜ……」
　まどろみに落ちそうになっていた意識が、ナイアルの言葉で引っ張り上げられる。
　茂み越しに、よろりと立ち上がるヒツジンの姿が見えた。
「大丈夫なんでしょうか」
　ささやき声で問いかける。
「魔獣だからな」

「そっか。鍛えてますもんねー」
ジンがそう言っていたことを思い出した。
後をつけねば。
「いやそれはおかしいだろ」
ナイアルが反論してきたが、今はそれどころではない。
隣でナイアルが、全ての魔獣が熱心な格闘家なわけではないからそれは理屈が通らないとかぶつぶつと言っていたが。
――細かいことは後回しです！
もちろんドロシーもナイアルも、追いかける準備は整えてある。
「垣根が壊れてやがる」
森に面して建てられた柵の一部が壊れている。ヒツジンが壊して入ってきたのか、それとも元々壊れていたのかは判らない。
――後で女将さんに言っておかなくちゃ。ドロシーは心の中のメモ帳に書きつけた。
ヒツジンは壊れた垣根を抜け、裏の森のほうへ。
ドロシーたちも続く。
垣根の一部に服の裾を引っ掛けてちょっと焦ったけれど、小さなかぎ裂きを作っただけでなんとか抜けた。

「おうちに帰るんでしょうか……」
「さて……」
夜明けが近づいていた。東の空に薄明が始まっている。
丘が稜線に沿って輝いていた。白く縁取りされて、墨絵のように山並みが浮かびあがっている。あの向こうにお日様が出番を窺っているのだ。
足下に気をつけながら進んだ。
気づかれないようにと手持ちの導力灯さえ灯していない。
宿の背後は木に覆われた丘になっていて、さほど傾斜はないとはいえ、ヒツジンの後を追うのは大変だった。
相手は魔獣なのだ。街道など通るはずもない。うっかりしてた。
それでも後を追うことが可能だったのは、片角のヒツジンの傷が深く、よろよろとよろけながらのゆっくりとした歩みだったからである。いつ倒れてもおかしくない様子だったからハラハラしてしまう。
丘を越え、下りになり、ヒツジンは東から北へと進む方法を変える。歩く速度がわずかに速まった。すこし苦しそうだ。追いかけるドロシーたちの息もあがりはじめた。
平らな草の原へと辿りつく。
トラット平原。

朝日が顔を覗かせる。
緑の草地が目の前をゆるく下っていた。その中を白いぽつんとした影が進んでいる。
隠れるところのない平原だ。少し距離を開けて追いかける。
やがて――。
もこもことした白い花畑というか、綿花の畑というか、芒の原というか、そんな一角が見えてきて。
なんだ？　と、一瞬追いかける足が止まった。じっと見ていて、勘違いに気づく。
もこもこが蠢いていた。
草が風になびくような動きではない。もっとこう――複雑に波打つような。
その蠢く大きな白い塊の中に片角のヒツジンが入ってゆく。大柄な片角の格闘家ヒツジンは、塊の中で頭ひとつ抜き出ている。
幾つもの鳴き声があがった。「エェェェェエ」という声が空気を震わせて響き渡る。
「おい、待てあれって」
ナイアルが慌てる。ドロシーもぞくりと鳥肌を立ててその場で立ちすくむ。
――あれって、まさかまさかですけど！
嫌な予感。だが見えている光景はそのまさかなのだ。
綿花の畑なんかじゃない。

あれは――くっつきあっているから大きな塊に見えただけの。
百を楽に越えてそうな……ヒツジンの群れだ！
眩暈がした。
なんということ。ドロシーたちは、彼らの村にやってきてしまったのだ！
「おい。倒れたぞ！」
「えっ」
ナイアルの言葉に慌てて視線を最初に追っていたあのヒツジンに戻す。群れから頭ひとつ抜けていた姿が見えない。埋もれてしまっている。
ナイアルの言うように倒れてしまったのだ！
せっかく助けたのに、と心配している余裕は実のところ、ドロシーたちにはなくなってしまっていた。
エェェェェエ！
エェエェ！
エェェェェェェエ！
そんな、たくさんのヒツジンの鳴き声と、土煙をあげて草原をこちらに向かって全力で駆けてくる白い塊たち。
「やべぇ！　逃げるぞ、ドロシー！」

ふたりとも即座に背中を向けて逃げ出そうとしたのだけれど、あっという間に回り込まれてしまった！

11

当然ながら、ヒツジンに囲まれたのは生まれて初めてだ。

直接ではないが戦ったことはある。先日の、ジンや、見習い遊撃士コンビ、つまりエステルとヨシュアとヒツジンを探して街道沿いを歩いたときも、野良のヒツジンとは戦いになった。

けれど、それでも相手は四匹とか、せいぜい五匹あたりだ。

だが今や、ナイアルとドロシーは、ぎっしりと隙間なく囲まれてしまっていた。

二十匹以上はいる。

「唐突ですが、先輩。ヒツジンって『匹』でいいんでしょうか。それとも『頭』ですか。はて?」

「三を越えたら、『いっぱい』でいいんじゃねえかな」

「あー、なるほど。それはいい案ですよぅ。先輩さすがです！」

「そりゃどうも」

とか、軽口でも言わねば精神が持たない状況だ。

完全に命の危機だった。

どのヒツジンも目が血走っていた。ぎらぎらとした瞳で見つめてきていて、じりじりと輪を狭めてくる。まるで親の仇でも見るかのような目つきだ。

ひょっとして……恨まれてる?

「えっと……」

あの格闘家ヒツジンが傷だらけで帰ってきて、その後をドロシーたちが追っていた。

つまり――。

襲ったヤツが　↓　止めをさそうと追いかけてきた。

そういう結論だろうか。

「わ、わたしたちがあの子を傷つけたわけじゃないですよぅ！」

「ってな言葉が通じてくれりゃいいんだけどな！」

通じそうもなかった。

両手を前に突き出して、ちがうちがうと手を振ってみたが、ボディランゲージもどうやら効果なさげ。

これは困った。

口の中がからからに乾いてしまう。もうだめだ。思ったら、自然と手は自分の鞄へと伸びて

いて、カメラを引っ張り出していたのには我ながら驚いてしまう。
「おまえ。それで何を写す気だよ」
　ナイアル先輩の声も呆れた調子になっている。
「自分でもよくわかりません！」
「ったく。なんてぇ、カメラ馬鹿だよ。しょうがねぇ。こうなったら、なんとかお前だけでも逃がして……。」
　ナイアル先輩が何か言おうとしたときだ。
　囲んでいた輪の一角が切れた。
　自然に左右に分かれて、空いた隙間をぬっと一体のヒツジンが姿を見せたのだ。
　周りのヒツジンたちよりも、飛びぬけて背が高い。
　頭の左右のくるりと丸まった角の片方が折れていた。
　なにより全身のあちこちにぐるぐると巻かれた包帯の数々。
　それは、ドロシーたちが手当てしたあの片角の格闘家ヒツジンだったのだ。
　一歩前に出ると、蹄をドロシーたちに向けながら、仲間たちに向かって、ひとことふたことと叫ぶ。一匹のヒツジンが抗議をあげるかのように啼いたが、片角のヒツジンが叫び返すと、ぴたりと口をつぐんだ。
「こいつはもしかして……」

　ナイアル先輩が期待を込めた瞳で事態を見守っている。
と、そのとき輪のもう一箇所が切れた。
　姿を見せたのは、ずいぶんと年老いたヒツジンだった。
「長老……ってとこか……」
　ナイアルが言った。
　年老いているとわかるのは、全身の毛が薄くなってヒツジン特有の毛並みのモフモフ感がなくなっているからだ。身体も折れ曲がって小さくなっている。
　だが、瞳の鋭さだけは失っていない。
　その老ヒツジンはゆっくりと格闘家ヒツジンのところへと歩みよると、ぽんぽんと優しく身体を叩いた。労わるように。
　それから、「エエエ」としわがれた声で輪になっているヒツジンたちに叫ぶ。
　すっ、とヒツジンたちから猛々しい雰囲気が消えたのを感じる。
「なるほど……確かに長老さんみたいですよ……」
　これで杖でもついていたら、さぞかしお似合いだったろう。だが、さすがにヒツジンにはそういう文化はないようだ。魔獣だし。
　輪が解けた。
　老ヒツジン——ここは長老ヒツジンと呼んでおこう——が、蹄をくいっと手前に引いて、ド

ロシーたちを促した。
「ついてこい、って言ってるみたいだな」
「はい……」
さすがに逆らう気にはなれない。敵意を見せなくなったとはいえ、まだ大勢のヒツジンたちがドロシーたちの一挙手一投足をじっと見つめているのだ。
並んで歩く格闘家ヒツジンと長老ヒツジンの背中を追いかける。
こうしてドロシーとナイアルは、おそらくは世界で初めてヒツジンの一族たちに招待されることになり――。
格闘家の彼が大怪我を負った原因を知ることになった。

12

トラット平原のヒツジンの中に格闘好きな一族がいる。
《不動のジン》が確かそう言っていた。
おそらくはそれなりの激しい稽古を重ねているはずだ。

とも。が、しかし、それがまさかこういうことだとは思わなかった。
ヒツジンたちの群れの中に招き入れられたドロシーたちだが、すぐに何かされるというわけではなかった。
むしろ放っておかれてしまった。
ヒツジンたちはいっせいに稽古を始めてしまったのだ。
互いに距離をとると、格闘の演舞のような動きを繰り返している。
右の蹄を腰元に引いてから突き出す。次は左。左右の蹴りを上段、中段、下段と仮想の敵に向かって繰り出してから、くるっと背中を向けて回し蹴り。
それで一セット。数回繰り返してから、今度は別の型を始める。
大勢のヒツジンたちが、「エエ！」「エッ！」「エエエエ！」と声を上げながら、稽古を続けている。見てて壮観だ。
確かにこれは格闘好きな一族だ。
――なるほど、あの遠目から見たときのうぞうぞとした動きはこれか！
ひとつ謎が解けた。
「早朝稽古ってところか……」
「これ、毎日やってるんでしょうか」

「だろうな。足下を見ろよ」
「へ？」
ヒツジンたちの練習場の地面には草が生えていない。なるほど、毎日、こんな稽古を繰り返している証拠だ。
「この子たちって……草を食べるんじゃ……」
「だからだろ。決まった場所でやらねーと、食いもんがなくなるじゃねえか」
「あ、なる……」
ってことは意外とこの子たち賢いのではないだろうか。
「エエエ」
声を掛けられた。振り返ると、子どものヒツジンがいた。明らかに小さい。おとなのヒツジンの半分ほどしかなかった。黒目が大きくて可愛いっ！
両手で何かを抱えていて、ドロシーに向かって差し出してくる。
「これは……」
「食えってことじゃねーか？」
「う……これをですか？」
葉っぱだった。たぶん、ロイヤルリーフ。お菓子の風味付けに使われるやつ。間違っても、生で大量に食べるものではない。せめてサンドイッチに挟むとか、サラダにするならばともかく。これを食えと？
「知ってるか？　たいていの異文化交流の基本は出された食い物を断らないこと、だぞ。同じ釜の飯、って言い方があるだろ。同じものを食う奴は仲間。食わない奴は敵ってことだな」
「ええと、その」
「ちょっとでいいから口に入れとけ。俺は食うぞ。死にたくねーからな」
どかっと腰を下ろして、ナイアルがロイヤルリーフを掴む。
「食べます。わたしも食べますってば！　食べますよぅ！」
隣に腰を下ろして、慌ててドロシーも一枚にかぶりついた。少々硬いが我慢だ。なんとか噛み砕く。
その途端に鼻に抜けるような青臭い味が口いっぱいに広がった。
「うぇぇええ。おいしくないいいい！」
「うっ。こいつは想像以上だな。野生のやつは香りも強いし……」
「エエ？」
――ん？
なんで、この子びっくりしてるの？
その子の後ろから、もう一匹の子ヒツジンが現れて、どさどさとドロシーたちの前に抱えたものを下ろした。

完熟したリンゴ、オレンジ、トマト（天然のだから苦くない！）……。
あまぁいフルーツの数々……。
――あれ？　あれあれえ？
「おまえさんたち、なんでそんなもんを口いっぱいに頬張ってるんだ？　そいつはここじゃ薬草代わりだぞ」
ごっくん！
声にびっくりして、口の中のものを呑みこんでしまった！
うう、激、まずいですー。でもそういえば、ロイヤルリーフは薬草茶のレシピで見たような……いや、それよりこの声は！
その男は、ぬっと大きな熊のような身体を乗り出して、腰を下ろしたドロシーとナイアルのふたりを覗き込んでくる。
「ふ、《不動のジン》！」
ナイアルの叫びに、にっと口の端をあげて、熊のような大男が笑った。

13

「稽古の場所を探したんだ。格闘好きな一族なら、それなりの鍛錬場を必要とするだろうと睨んでな」
リンゴを皮ごと丸かじりながらジンが言った。
まだ日が昇る前から、だそうだ。
ドロシーたちと合流する前に探し出すつもりだったのだろう。
あの片角のヒツジンと出会ったあたりから、街道沿いを丹念に歩いて見つけたそうだ。
なるほど、と思いつつ。別の感想も持ってしまう。
「よく、無事だったな、おい」
ナイアル先輩が代弁してくれた。
格闘家の集団であるこの一族と出会って、何もなかったというのが信じられない。
ドロシーたちなど、もう少しで叩きのめされるところだったのに。
「武の道は、異なる道を歩こうとも目指す頂は同じだからなぁ。戦って、勝つ。それだけだ。判るだろう？」
同意を促すように答えになってない答えを返してくる。
――いえ、その真理は申し訳ないのですがまったく判らなく……。
ナイアルが妙に達観した表情になって「そういうもんか」とだけ言った。
「だが、あのヒツジンがいなかったんでな。違う一族かと思ったが、まさか、おまえさんたちのいる温泉に行っていたとはな」

「ひどい怪我でしたよぅ」
「うむ……」
ジンさんが唸った。
「おまえさんたち、気づいたかい？」
「は？」
「ええと……何がですかー？」
「この群れの事だ。よく見てみると、年寄りと子どもばかり。若者のヒツジンもいるにはいるが……」
そう言いながら、ジンが、稽古を済ませて食事をしているヒツジンたちを見やる。
ドロシーとナイアルも自然と彼らを眺めることになり。
「そういえば……」
小さなヒツジンたちが子どもたちだというのは大きさでわかる。残った大きなヒツジンたちが、年老いているかどうかは、最初は気づかなかった。
けれど、注意してみると判ってくる。
確かに長老ほどではないにしろ、毛並みが艶を失っていたり、やや背中を丸めていたりしているものが多い。羊のように四本の足で平原を駆けていたら、腰が曲がったりなどはしないのだろうが……。直立歩行すると、人間みたいな老化の症状が出てくるわけだ。

そして、まれにいる若者ヒツジンらしきものたちだが。
「怪我、してますよ……」
「ああ。あれは戦いの痕だな」
「あの片角のやつも、ひどい怪我だったぜ。でかい角でやられたような傷があったが……」
ナイアルが言った。
「おそらく、敵、だな」
「敵……ですか」
《不動のジン》の瞳がぎらりと光る。
「うむ。かなり大きな魔獣の類だろう。この一族はそいつに狙われている。何度も襲われて、おそらくはその度に……」
戦いを挑んだ若いものたちから順にやられてしまった、ということか。それで若ヒツジンの数が少ないわけだ。
「それじゃ、ひょっとしてあの片角のヒツジンも……」
「そいつに挑んだのだろうな。おそらく。奴はこの一族で最も強い。だからこそ、ここまで生き延びてきたし、今回も生き延びたわけだ」
「死に掛けてましたよぅ！」
思わず声が震えた。

ドロシーたちが見つけなければ、そのまま死んでいたかもしれないのだ。
「おそろしく底意地の悪い敵だ。なぶるようにして、少しずつこの一族を弱めているのだろう。そして最後には……」
「こ、ここから逃げるわけには……いかないんですか？」
「安全なだけの場所を求めても、餌場が遠くなれば、生き延びるのは難しくなる。それに、子どもと年寄りばかりでは、いたずらに彷徨うのは……」
ドロシーたちの前に子ヒツジンたちがやってくる。
くりくりとした瞳でドロシーの前にあるフルーツの山と、ドロシーとを交互に見つめてきた。
「食べます？　わたし、もうお腹いっぱいだから、もっていっていいですよー」
言葉が通じたとは思えないが、子ヒツジンたちは小さな声で鳴きながら、フルーツをうれしそうに抱えてもっていった。
思わずなごんでしまう。
緩んだ頬が、けれど、一瞬後に引きつった。
エエエエ！　と、群れの端のほうで悲鳴のような声があがった。
「現れた、か」
まなざしの方向へと目を向ければ、忽然と山が出現していた。
いや——違う。

あの山は動いている。
小山のように見えたのは大型の動物だったのだ。
全身を覆う鎧のように盛りあがった灰色の硬い皮膚。大きく反り返った角を鼻の上にいだき、四本の丸太のように太い足を踏み鳴らして近づいてくる。
「クロノサイダーか！」
うめくようにナイアルが言った。
クロノサイダー。
トラット平原に時折り出現するという大型の魔獣だ。
最悪の敵だった。弱点らしき弱点もなく、しばしば遊撃士協会に手配書が出回る危険な相手。旅人たちの天敵でもある。しかも、現れた奴は見上げるほども大きくて、角の先は建物の二階に届いてしまいそうなほどの高さがあった。
「あいつ、まだ治ってないのに！」
「それが武道家ってもんさ」
ナイアルとジンの言葉に目を向ければ、蜘蛛の子を散らすように逃げ始めた群れの中で、たったひとり流れに逆らって魔獣に向かって歩いていくヒツジンがいる。
片角の格闘家ヒツジンだった。
「護るものがあるうちは、敵に背中は見せられんのさ」

ジンが言った。
そして、《不動のジン》はゆらりと立ち上がるのだ。
「行くのか」
「ああ。あのヒツジン、ここで死なせるには惜しいんでな」
「で、でも、アレってば、ジンさんの三倍くらいの大きさがありますよ！」
「そうだな」
ジンが言った。
「だから、どうした――と言っておこうか。血がたぎる。面白いじゃないか」
そう言って、にっと笑うのだから、武道家というのは訳がわからない。無茶ですよぅ。
「できるかどうかではないのさ。やるかやらないかだよ」
ジンが言って、それで止めることができなくなった。
なによりも――ジンは遊撃士なのだ。
困っている人がいたら助ける。
それが遊撃士というものだから。止められない。止めてはいけない。
人ではなくて今回は相手がヒツジンではあったけれど。

14

片角のヒツジンがゆっくりとクロノサイダーへと近づいてゆく。
己に近づいてくる輩にようやく気づいて、巨大な魔獣の歩みが止まった。
睥睨するかのように、相手を見下ろした。
そんなはずはないのに、見つめているドロシーには、クロノサイダーが嗤ったように見えた。
片角のヒツジンは恐れることなく歩を進める。
身体に巻いていた包帯がはずれて、片端が風になびいている。身体にまとわりつく外れかけた包帯をヒツジンはほどいて捨てる。風が血に染まった帯をさらって飛ばした。
十歩ほどの距離を置いて立ち止まり、魔獣を睨みあげる。
涼しげな瞳は覚悟を決めた者のそれだ。
腰を落とし、格闘家のヒツジンは裂ぱくの気合を放った。

エェェェェエッ！

その声を合図に戦いが始まった！
クロノサイダーの片足が、ヒツジンの頭の上まで持ち上がった。
そのまま勢いよく落とす。



頭の上から、身体より大きな金槌が降ってくるようなものだ。それをぎりぎりでヒツジンはかわした。

背中を向けて回りながら、残した脚のほうへと近づき、肘打ちを叩き込む。

打って、すぐに離れた。

「効いてない⁉」

ドロシーは思わず叫んでしまった。

クロノサイダーはぴくりとも動かなかったし声さえあげなかった。

「まあ、クロノサイダーの皮は《黄金の鎧》なんて言われるくらいだからなぁ」

「セ、センパイってば、何を悠長に！」

「慌てるなって、ほれ、助っ人が参戦したぜ」

辿りついたジンが、駆け寄った勢いのまま飛び上がり、魔獣の腹に拳を叩き込んだのだ。

「一発じゃねえぞ、あれ！」

「五発でした」

「よく見えるな」

感心した声で言われてしまったが、ドロシーは見るだけならばなんということもない。

回る風車の羽の数を数えて驚かれたこともあるくらいだ。

ジンの五連撃に、さすがのクロノサイダーも多少は堪えたようで、わずかに身体を傾けた。

横から入ってきたジンにヒツジンが気づいた。
ちら、と視線を交し合う。
それも一瞬のこと。すぐに互いに離れた。逆方向にだ。そこから勢いをつけてクロノサイダーの両のわき腹へとふたり同時に飛び蹴りを放った。
グォオ、と魔獣が始めて声をあげる。
「やった!」
「いや。まだだ!」
巨大な魔獣は頭を左右に振り、今度は長い角でヒツジンとジンを狙った。
ジンは軽くよけてみせたが、怪我を負っている格闘家は逃げ遅れてしまう。
「ああ!」
角に引っ掛けられ、ヒツジンの身体が宙に浮いた。
十アージュほども吹っ飛ばされ、草原に叩きつけられる。身体が跳ねて、二、三アージュほど転がった。
それを見てとると、クロノサイダーの視線はヒツジンだけに向いた。
――あの魔獣、弱いほうから!
「って、おい。ドロシー!」
ナイアルの声を無視して、ドロシーはカメラを掴んで走り出していた。

「お、おい。無茶だろ!」
追いかけてくる先輩記者に向かって声だけ返す。
できるかどうかなんて知らない。でも――
「これができるのは、わたしだけですから、だからわたしがやらないと――」
「ちっ!」
舌打ちひとつで止めるのをやめて並んで走ってくれるんだから、ナイアル・バーンズという人物はお人よしなの。そこがいいところなんだけど。
「あいつらの邪魔になるようなら、おまえの襟首ひっつかんで逃げるからな!」
「わかってます!」
クロノサイダーはジンを無視して片角ヒツジンのほうへと向きを変えた。
十アージュは魔獣には三歩か四歩の距離だ。そして、地面に叩きつけられたヒツジンはまだ起き上がってこない。
クロノサイダーが邪魔な虫を踏み潰すべく足を上げた。
――させません!
オーバルカメラの夜間用の閃光機能のボタンを押し込む。
「センパイ!」
「おう!」

ナイアルが小石を拾って魔獣の顔をめがけて投げつけた。
痛くなどないだろう。葉っぱで撫でられたくらいの感じに違いない。それでも気になったとみえて、一瞬だけクロノサイダーの顔がこちらに向く。
――今だ！
魔獣の顔を狙ってシャッターを切った。
青空の中にある太陽とは別に、もうひとつの太陽が一瞬だけ現れてクロノサイダーの目を焼いた。
苦悶の声を上げてクロノサイダーが顔をのけぞらせる。
まともに光を見てしまったのだ。
怒りの声をあげ、魔獣がドロシーを見やる。
こちらに向かって突進してきた！
「って、そこまで怒りますか！」
「あたりまえだろ、馬鹿。逃げるぞ！」
無理だ。それが判ってしまう。この距離ではとても逃げられない。まるで時間の流れがゆっくりになったみたいに感じた。
小山のような巨体が視界の中いっぱいになって近づいてくる。
頭を低く下げ、角をわざと地面すれすれにして突っ込んでくる。あの角でドロシーを串刺しにするつもりなのだ。
ああ、だめだ。
これは死んだかも。
ドロシーの身体は恐怖に縛られて動けない。
距離、もうわずか三アージュ。いやもう、二、一……。
尖った角の先がドロシーに触れようとする直前に、何かが視界の中に入りこんでいた。
大きな影が目の前に現れて、魔獣の姿をふさいだのだ。
「ジン……さん……」
大きな影がジンの背中だと気づいた。
それと同時だ。襟元を掴まれて強引に引っ張られた。目の前からジンの背中が消える。
いや、ドロシーのほうが転がったのだ。ナイアルに首根っこを掴まれて強引に地面に引き倒された。
間一髪。
鈍い衝撃音とともに、土煙があがった。
たった今までドロシーがいた場所の大地がえぐれて深い溝を作っていた。二本の溝は五アージュほど続いたところで、ジンの足下に繋がっていた。
「ジンさん！」

ドロシーの悲鳴があがる。
ジンは両手で角を抱きかかえるようにして掴んでいた。まともに魔獣の突進を受けてみせて、堪えたのだ。傷を負ってないのが不思議なくらいだ。地面を掘った五アージュの溝が魔獣の勢いを消すまでに必要とされた距離だった。
「おおおおお」
ジンが吼える。
クロノサイダーの頭の角を掴んだまま力比べをしている。
自らの身体の三倍はあろうかという魔獣と。
「そんな無茶……」
「いや……。ドロシー、見てろよ。なぜあいつが《不動の》ジンと呼ばれるかが判ると思うぜ」
ナイアルが言った。
「おおおおおおおお！」
ジンが吼える。両の足は、削った地面を捉えてもう離さない。クロノサイダーは角を振りほどこうとしているようだが、まるで角を地面に突き刺してしまったかのように動かせないでいた。
まさに《不動》。
大地を味方につけたかのように、ジンの身体は動かない。それどころか――。

――えっ……うそ。
両腕で掴んだ角を、ジンはじりじりと斜めに引き倒している。
あのまま力を入れれば――。
「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおりゃああ！」
鈍い音があがった。
「角が！」
折れてしまった！
中ほどで折れて、クロノサイダーが今までに倍する悲鳴をあげる。抱えた角の片割れをジンは投げ捨てた。
「これで……対等だろう？」
ジンが声をかけた相手は、ヒツジンだ。
ようやく起き上がってきた片角のヒツジンが、まるでジンの言葉を理解したかのように一度だけ深く頷いた。
「では、行くぞ」
ジンが言って、ヒツジンが応えるように「エエエッ」と鳴いた。
今度もふたり同時だ。
駆け寄って飛び上がると、拳を魔獣の顔の両側から叩き込んだ。

その数——片手で五回。両腕で十回。それがふたりぶんで、合計二十回。ほぼ一瞬ですべて打ち込まれて、それで勝負がついた。
交差するようにしてジンとヒツジンが大地に飛び下りて魔獣に背中を向ける。
ふたりの背後で、魔獣の小山のような巨体がゆっくりと倒れた。
こうして、トラット平原に棲む格闘家ヒツジンの一族に平和が戻ったのだ。

エピローグ

じゃあねー、とドロシーは彼らに向かって言った。
言葉が通じているようには見えなかったけれど、言わんとすることは伝わったのだろう。特に子ヒツジンたちが寂しそうな瞳でドロシーを見てる。
ドロシーもちょっとだけ寂しかった。
そうだ、と思いつく。
別れる前に、これは言っておかなくちゃ。
「あのですね。人間に悪さをしちゃだめですよー。悪いことしたら、遊撃士があなたたちの尻尾を切っちゃいますからね！」

「こいつら、こっちの言葉が判ってるようには見えないけどな」
ナイアルがせっかくの言葉に水を挿してくる。
「それでも……俺はあいつだけは人を襲わんと思う」
《不動のジン》が、長老の傍らに立つ《片角のヒツジン》を見ながら言った。
「わたしもそう思いますよー」
ドロシーの言葉にナイアルも反論しなかった。
そして、あのヒツジンがいるかぎり、この一族だけは人間と争わないのではないか。
そんなことを信じてしまう。
格闘家のヒツジンの一族と別れて、ドロシーたちは街道へと戻ってきた。そこで、ジンとは別れた。ドロシーたちは一度、《紅葉亭》に戻らなければならないからだ。
ジンは、飄々とした様子で、「またな」と言った。
再会を約束する別れの言葉だ。
ドロシーもまた、どこかで会えるような気がしていた。
「またですよぅ」
「じゃあな」
そのままドロシーたちは街道を南へと進んで温泉旅館まで戻った。

※

「へえ、よく撮れてるじゃないか。いいね！」

カメラの後ろ側にある投影版の画像を見ながら《紅葉亭》の女将が声を弾ませる。

「おまえ、ちゃっかりしてんのな」

脇からナイアルが茶々を入れてくる。

「お誉めにあずかりましてー」

「誉めてねえよ」

「後輩の機転を誉めてくれてもよいと思うのですが」

「誉めねえから」

ナイアルはあくまで厳しい態度を貫くつもりのようだ。

しかし、とドロシーは思う。咄嗟にシャッターを切ったところまでは誰でもできるだろうけれど、ここまで至近距離で魔獣同士の戦いをカメラに収めた人はいないだろう。貴重なのではないだろうか。

投影版に映っているのは、片角のヒツジンと人間の武道家が、大型の魔獣クロノサイダーに拳を叩きこんでいる絵だ。

ヒツジンとクロノサイダー。

どちらもツァイス地方で有名な魔獣なのだった。

「うん。かっこいいよ！　どうやって作ったか知らないけどさ。ヒツジンは可愛いことでも有名だし。ツァイスの思い出としてはばっちりだね！」

「えっ。いえ、作ったのではなくて、ほんとにそのまま映しただけなのですが」

「いやいや、そこまでしてくれなくていいんだよ。これが合成だって、どっちもツァイスの名物であることに変わりはないからね」

「いえ、ほんとにこれは……」

「まあ、魔獣同士だって戦うこともあるかもね。人間が傍に寄れるとは思わないけれどさ」

何度説明しても、女将さんは写真に収めた戦いが、実際に目の前であったことだと信じてくれなかった。

まあいいか、とドロシーは途中で諦めた。

だいじなのは、女将さんが喜んでくれることなのだし。

後は、宿の土産としてこの写真を焼き増して、ポストカードにすることだ。それは王都に戻ってからの作業になるだろう。

まだまだ写真印刷は値が張るので、ドロシーが作成できるポストカードの枚数はそんなに多くはないだろうけれど、評判さえよければまた作ることはできる。元の画像は感光クオーツに残っているのだし。

そしてなによりも、お世話になった女将さんを自分の力で喜ばせることができた、ということがドロシーにとっては嬉しいことなのだった。
効能抜群を言うだけあって、一晩ですっかり疲れが取れてしまった。
ゆっくりと温泉に入りなおした。
翌朝になってから、ドロシーとナイアルはツァイスに向けて旅館を出る。
「じゃあ、できあがったら送ります」
「あいよ。楽しみに待ってるよ」
別れ際に女将さんが言って、にっこりと嬉しそうに微笑んだ。
街道を歩いている間、ナイアルはこれからの王都での取材について話してくれた。
どうやら、大きな事件を追っていて、その事件の山場が近い、と感じているらしい。
意気込むナイアルを見ていて、ドロシーも気合を入れなおした。
今までは気に入った風景を見つけては撮るだけだったけれど。
——あたしだからできること、か……。
ツァイスで再会したときにナイアル先輩が言ってくれた。
記憶の中の思い出はいつか色あせる。けど、感光クオーツに刻まれた風景は残る。
色あせない思い出を切り抜いてみせるのは、おまえ得意だろ？

ドロシーにはまだ自分に何ができて何ができないのかわからない。
確信なんてもてない。
それでも——
もし、自分が写真を撮ることで、色あせない思い出を残せるなら……。
投影版の片角のヒツジンはいつまでも一葉の写真の中で戦っているのだろう。
仲間たちを護るために。
そんなヒツジンがいたことを忘れずに残しておけるのなら。
ひょっとしたら、自分がカメラを構えることにも意味があるのかもしれない……。
「ところでひとつだけ心配がある」
街道をツァイスへと向かいながらナイアルが思い出したようにぽつりと言った。
「はい？　なんですか、先輩」
「あのヒツジンたちだけどよ」
「……格闘家の？」
「おう」

何を今さら心配しているというのだろう、このひとは。
そう思わないでもなかった。
ナイアルの言葉の続きを聞くまでは。
「あいつら、片角に聞けば《紅葉亭》の温泉の位置が判るってことだよな？」
「それが……何か？」
「効能抜群の温泉。あいつら、放っておくと思うか？」
《紅葉亭》の温泉。そこにやって来る無防備な旅人たち。彼らがあのヒツジンたちとばったり出会うなんてことがなければいいのだが……。
そうナイアルは心配するのだ。
「ま、まさかですよぅ！　あは。あはははは。そんな、まさか……」
――まさか、ねえ？



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.153

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社 ACQUA
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒 101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/